

ポスト・ブックレビュー

／いてその必要性ないし必然性が痛切に感じられる確に把握されていないかぎり、畢竟、東の間の流行と帰する運命にある。それが外国から輸入されたものである場合には、いっその可能性が高い。たとえば構造主義、記号論に關しても、そのような危惧はささやかされてすでに久しく、邦訳の相次ぐ出版も構造主義・記号論の浸透度合を深めているとは認めがたい。しかし、状況との関連とは別に、紹介し普及しようとする仕方にも問題はなからうか。

本書は、一九七七年にイギリスで刊行されたものの邦訳であるが、著者テレンス・ホークスの言によれば、構造主義・記号論は、またイギリスにとっても外来

テレンス・ホークス 池上 嘉彦・他訳

構造主義と記号論

紀伊国屋書店・刊(二五〇〇円)

▲著者紹介Vイギリスのウェールズにあるカディフ大学の英語英文学の相当教授。

義づけたのち、ソシュール、アメリカ言語学、レヴィ・ストロース、ロシア・フォルマリズム、ヨーロッパの構造言語学、ヤコブソン、グレアム、ドドロフ、バルト、デリダ、バース等を相互連関のなかで平易かつ明快に紹介している。

二 初歩的な解説書が現時点であらわ

わかりやすい天安門以後の現代中国論

岡田巨弘

鄧小平の中国

日本経済新聞社・刊(九五〇円)



▲著者紹介V(おかだ・たかひろ) 1937年生まれ。日本経済新聞社 外部編集委員。



および社会の動向を生きて描いたものである。著者が着任して間もなく発生した天安門事件、唐山大地震、毛沢東の死、北京政変など激動の中国に身を投じながら、中国社会の基本的な方向が鄧小平主導型の今日の「四つの現代化」へと取捨しつ

本 書は一九七六年三月から七九年三月まで、日本経済新聞社北京特派員であった著者が、みずからの取材体験に基づいて今日の中国の政治、経済

件、唐山大地震、毛沢東の死、北京政変など激動の中国に身を投じながら、中国社会の基本的な方向が鄧小平主導型の今日の「四つの現代化」へと取捨しつ

「まえがき」によれば「われわれは社会が急激に変化する時期に住んでいる」であり、その変化は「学問的諸研究の本質にまで必然的にその影響を及ぼし」ている。「ニュー・アクセン」は、この「変化の過程に抵抗するよりはこれを助長し、現在、文学ならびにその学問的研究を規定している境界線を強化するよりこれを拡大延長することを目指すものである」とのこと。本書は、このようなシリーズの編纂主幹みずすに迷わせ、新聞の信用を落とすだけだからだVと述べている報道の基本姿勢に由来するのである。

つ、「開かれた中国」へ歩みゆく過程が着実にフォローされていて、わかりやすい中国論になっている。

ところで、評者は、本書を書評するに当たって、著者がこの間の中国をどのように北京から報じていたかを縮刷版によって当たってみたが、天安門事件や北京政変についての著者の報道ぶりには、まだ情況判断が固まりにくい場合は北京からの送稿を見送っているようでもあり、また特別にシャープなものではなかった反面、記事全体に抑制がきいていて、全体的にはほぼ着実に情勢の推移を打電している。

「つまり誠実かつ冷静な報道ぶりなのであって、この点は、本書で著者が『人』人民日報』がおかしい」「党内の様子も変だ」とは気づいたが、これを新聞報道するにはウラ(確証)が必要だ。推測、憶測だけをおおげさに書き立てれば世の中をいたずら

も 努力にもかかわらず、この中国報道に関するかぎり、日本経済新聞の「信用」は、これまで地に落ちていた。わが国を代表するクォリティー・ペーパーでありながら、大変に残念なことだと私は日頃思ってきたが、たとえば、著者が比較的正確に北京政変後の情勢を打電しているのに、一方で一九七六年十月十五日付の「中国の異変(下)」という解説記事では「根づく文革世代」と題するまさに「信用を落とす」べき論評が載っている。そして著者は今春の中国側からの対日プラント契約の突然のキャンセルという「日本産業界を震撼させた経済事件」に言及しているが、これなどは、昨年二月の「中长期経済取り決め」や日中平和

味するわけではなく、「まえがき」にうたわれた立場からもうかがえるごとく、著者の視点は分明であり、本書であらば、構造主義がニュー・クリティシズムの帳を踏まないための批判的視点が瞭然とうたがわれている。また、初歩からはじめ、さらに深く進んでゆくための参考書目とその利用法が付されている。この特色は本書で親切な訳注と的確な訳者解説によっていっそう生かされている。

本 書は、けっして教科書的に流れることなく、確固たる問題意識に込められた、好個の「構造主義・記号論入門」とみなしうる。

(桑野 隆II東京工業大学専任講師)

友好条約の締結以来、中国の「四つの現代化」をあたかも中国式高度成長が始まったかのように錯覚して、ベタ記事でよいものを連日誇大に伝えた日本経済新聞にこそ、わが国の産業界を震ませた責任があったといえよう。

な お、著者は小学校六年生

のとき毛沢東の三文字に強い印象を受け、「日本の有力紙は天安門樓上で中華人民共和国の成立を宣言する毛主席の写真を大々的に掲載し、世界最大の人口を誇る社会主義国家の誕生を大々的に伝えた」と述べているが、実際には、日本の新聞はいずれも当時そのように報道したことはなく、日本経済新聞の場合、一九四九年十月一日付で一面下段に小さく、翌二日付でも一面下の小さな三段の記事のなかに毛沢東の写真があったにすぎない。

(中嶋 雄雄II 東京外国語大学教授)